

はじめに

37回生 竹本 修文

イスタンブルにイズニックタイルを使ったイスラム寺院を沢山建設したのは、オスマン朝が最も栄えていた時期であり、ヨハネス・フェルメールの「青いターバンの少女」が描かれた時期もオランダがイスラム国インドネシアにオランダ東インド会社を設立して、香辛料などの貿易で稼ぎまくり、最も栄えた時代だった。アムステルダムを歩くと17世紀に低湿地に松などの木材の杭を何万本も打ち込んで地盤を作り、レンガと石造りのビルを建て、正面に建設年を示すプレートを誇らしげに貼り付けている。ターバンもイスラムの影響かも知れない、と思った事だったが、予測は外れた。しかしタイミング良く西内先輩から、スペインやオランダを旅行のメールを頂いたので、オランダ部分を第3項に引用させていただき、フェルメールを基軸にオランダ雑感集にしてみようと思いつきました。

1 オランダの概要

☆ 本稿で話題にする場所を図1に①～⑥で示す。①首都アムステルダム、②スキポール空港、③フェルメールの「青いターバンの少女」があるデン・ハーグ、④フェルメールの出身地デルフト、⑤五稜郭があるナルデン、と⑥同じグローニンゲン。オランダの陸地の半分以上が海面下にあり、話題の①～⑥は全てこの低地帯にある。オランダ語でネーデルラント、英語でネザerlandと言うが、NetherlandsのNetherはゲルマン語が語源で、古英語になり現在に至る

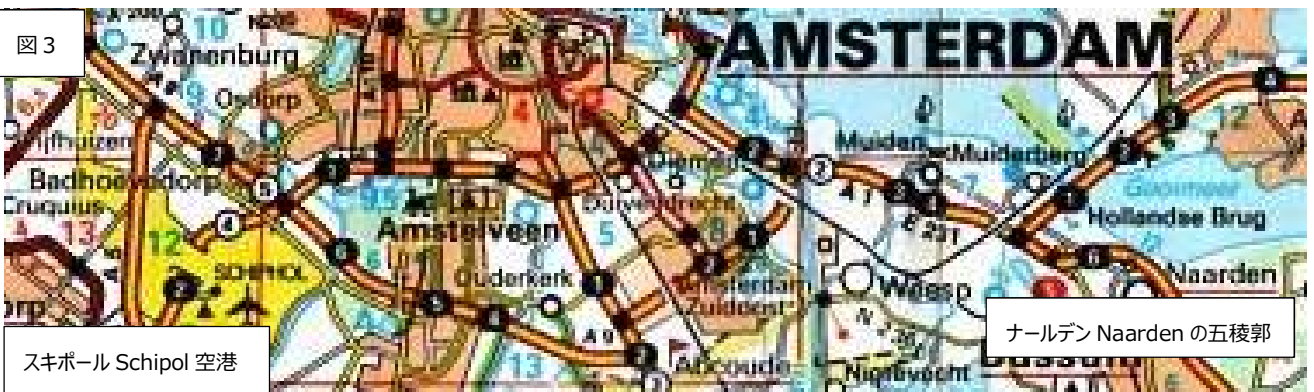


☆ 司馬遼太郎がオランダ紀行に、「まことに世界は神が作り給うたが、オランダだけはオランダ人が作ったということが良く分かる」と述べており、筆者もオランダの海面下に建設されたスキポール空港を訪問した時、土木技術者から同じ言葉を聞いた。至る所に嘗ては風車駆動、現在はエンジン駆動の排水ポンプがあり堤防の建設を継続している。

2 正式の首都：アムステルダム

☆ アムステルダムはオランダ王国の首都。ただし、政治の中心はデン・ハーグにある。アムステルダムは商業と観光が中心の街。元々は小さな漁村で、13世紀にアムステル川の河口にダム（現在のダム広場）を築き街が築かれた。16世紀には海運貿易の港町としてヨーロッパ屈指の都市へと発展。中央駅を中心に網の目状に広がる運河と、その運河に沿って並ぶ17世紀の豪商の邸宅が有名。長い間、中央駅が東京駅のモデルだというガイドブックがあったが、今では否定されている、筆者はドイツのライプツィヒではないか？と思う。設計者の辰野金吾しか知らないのかな？

☆ 航空路と空港：日本からの直行便はロシアのサンクトペテルブルクからデンマークを横断してアムステルダムに着く



☆ 図1の⑥のグローニンゲンにある五稜郭要塞を見降ろしながら下降する。滑走路が6本もあるので、運が良ければ、図4の東西の滑走路東端27(真北から時計回りに270度)に侵入する時に、ナールデン五稜郭を見ることが出来る。

☆ 五稜郭に関しては本年4月10日にKPCに投稿した拙稿「ルイ14世とヴォーバンの城郭建設を中心に」、に出典を記載した30回の西内先輩のご著書、「福沢諭吉の築城書訳から」涼川会文集、第1巻1号に：『小生が訪ねた函館五稜郭のモデルと云われるナールデンは、オランダを代表するヴォーバン式城郭であるが、その陵堡の入り口に着くや否や函館五稜郭にきたと錯覚するほど類似している。』と述べている。

☆ 図5は、ナールデン Naarden の五稜郭 図6は、グローニンゲンにある bourtange-groningen の五稜郭である



図5



図6

3 アムステルダム国立美術館

☆ 西内先輩のメールのオランダ旅行部分を引用します。「フェルメールの青の思い出はアムステルダム。大勢の仲間がゴッホ美術館に出かける中、一人でアムステルダム国立美術館に門外不出と言われるレンブラントの夜警を観に参りました。そうしたら、その傍にフェルメール室があり、著名な「牛乳を注ぐ女」や「手紙を読む青衣の女」を観ることが出来ました。アムステルダムのもう一つの思い出は、久良木君から薦められた世界一と称される花市場。城郭で言えば、スキポール空港着陸時に窓から見えた、五稜郭、四稜郭の数々。」

☆ 筆者が2007年に訪問した時の資料を使って、編集してみます。



中央駅と同じ建築家の設計、ゴッホ美術館や近代美術館他が並んでいる



↑ レンブラントの夜警 右は、フェルメールの牛乳を注ぐ女 →



4 事実上の首都：デン・ハーグ

☆ **市の概要**：憲法上の首都はアムステルダムだが、王室・国会・行政機関など首都機能はすべてデン・ハーグにある。固有名詞に定冠詞が付くのは異例で、英語でも **The Hague** ザ・ヘイグ と定冠詞が付く。国家機関だけでなく、国際機関が 150 もある。その一つに国際司法裁判所があり、2018 年まで**小和田 恆氏**が裁判官を務めていた。

☆ **マウリッツハウス美術館**：アーノルドゥスアンドリーデトンベはオランダの陸軍将校、美術品収集家で、1881 年にフェルメールの真珠の耳飾りの少女をデン・ハーグのオークションでたった 2 ギルダーで購入した。しかし、彼には相続人がいなくて 1902 年に寄贈したのがマウリッツハウス美術館だった。1995～1996 年に米ワシントン DC のナショナル・ギャラリーで開催されたフェルメール・ショーに出展されて好評を得た。2012 年からマウリッツハウス美術館の改修・拡張に合わせて、東京の**西洋美術館**、そして 2013～14 年にはアメリカの各地で巡回展示され、2014 年の伊ボローニアを最後に門外不出になった。



☆ 筆者がマウリッツハウス美術館へ行ったのは 2007 年で、「数年後には東京で見れたのに！」と残念がったり、「門外不出になって見られなくなる前に見てよかった」と思ったりしたことだった。結局は、上野で長蛇の列に並ぶより、久しぶりにオランダ・ベルギーでゆっくりして良かった！というのが結論です。

5 真珠の耳飾りの少女にまつわる話 主な出典：[Girl with a Pearl Earring - Wikipedia](https://en.wikipedia.org/wiki/Girl_with_a_Pearl_Earring)

☆ この絵画は 17 世紀のオランダで **tronie** と名付けられた**顔の表現を描く手法**で描かれている。描かれているのは、ヨーロッパの少女で、エキゾチックな服装で、東洋風のターバン、耳飾りにしている非常に大きい真珠を身に着けている。

☆ 2014 年に、オランダの天体物理学者 **Vincent Icke** は、「耳飾りの表面の光の反射光を観察すると、真珠よりは**磨かれた錫**ではないか？、**洋梨のような形**に見える、**耳飾りの大きさが大きすぎる**」と疑問を呈している。キャンバスに描かれた油絵の大

きさは、44.5cm X 39cmと小さく、"IVMeer"のサインはあるが、**日付が無い**。1665年ごろに描かれたものと推定され、最も新しい修復は1994年である。微妙な色使いと、鑑賞者に向けた少女の親しみのある視線が強調されている。修復中に発見された事は、今日では幾分まだら模様に見える暗い背景は、深いエナメルのような緑だった。この効果は、現在見られる黒い背景の上に透明な上薬を被せて作られている。

☆ 絵のタイトル

この絵のタイトルは、何世紀にも亘り展示する国々で色々な名前が付けられてきた。原タイトルはフェルメール死亡時の遺産目録にかかれた名前は2つあり、①「**トルコ風に描かれた**」で、これは、1696年にアムステルダムで売りに出された絵のカタログには、②「**芸術的とは見えないアンティーク衣装をまとった肖像画**」と記載されている。

☆ マウリッツハウス美術館に遺贈された後、この絵画は「**ターバンを巻いた少女 Girl with a Turban**」として有名になり、1675年には美術館の原目録名として記録された。当時のヨーロッパとトルコの戦争の時代は、ターバンが何か魅惑的なファッションのアクセサリになっていた。

☆ 1995年までに「**Girl with a Pearl (Meisje met de parel) 真珠を持った少女**」がより適切と考えられるようになった。事実、フェルメールの21の人物画の内、**真珠の首飾りの女、手紙を書く女、少女、赤い帽子の女、フルーツを持つ女**の5作品に耳飾りが描かれていて、**耳飾りはタイトルに入れる必然性はない**。

☆ **フェルメール・ブルー**

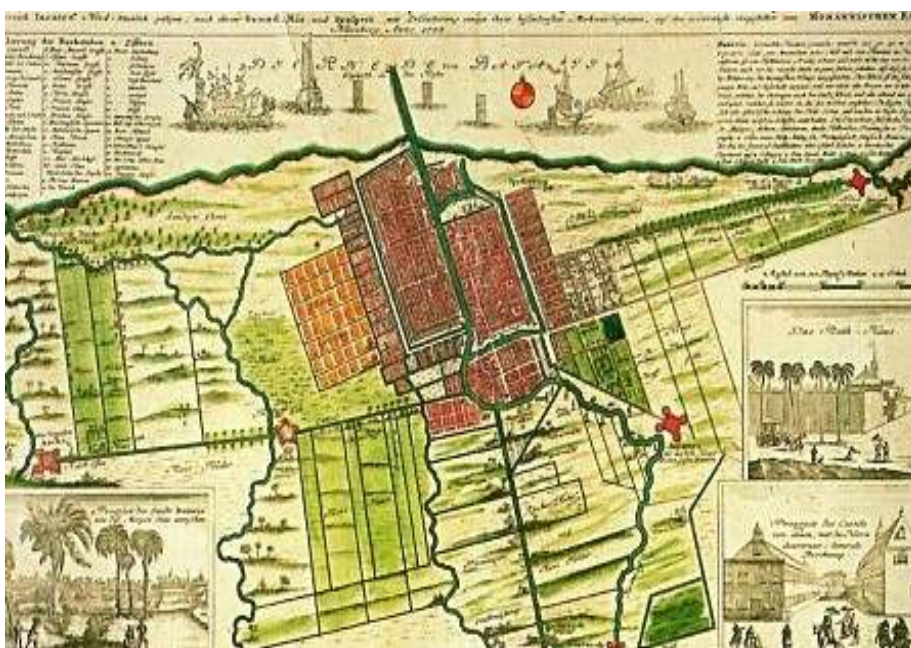
出典：ウキペディア

真珠の耳飾りの少女や**牛乳を注ぐ女**など、フェルメールの絵に使用される鮮やかな青は**フェルメール・ブルー**と呼ばれる。古代から中東を中心に活用されてきた鉱石ラピスラズリ（和名では**瑠璃**）を原料とした青色顔料で、天然ウルトラマリンである。19世紀には人工合成して顔料を製造するようになるが、フェルメールの時代は天然ウルトラマリンである。筆者は誕生石みは疎いが、**青色のラピスラズリも青緑色のトルコ石も誕生石です**。

6 **オランダの黄金時代 17世紀**

絵の出典：「世界の歴史 第6巻 近代ヨーロッパ文明の成立」創元社

① **オランダ東インド会社** 現ジャカルタに本部を置いた当時の絵だが、殆ど理解できない。



ジャカルタのオランダ東インド会社の拠点



アムステルダムの国際交易港

② オランダ西インド会社

- ☆ オランダは 17 世紀初めには現**ニューヨーク州のハドソン川上流**に毛皮を求めて進出していた。現ニューヨーク州のマンハッタン島の南端にオランダ人居住地を設立し、アメリカにおける領土 New Netherland の植民地政府とした。そこにオランダ西インド会社を設立し、毛皮工場を建設し、これを防衛する為に New Amsterdam アムステルダム要塞を建設した。ニューヨークに**ハーレム**というカリブ海出身者が多い街があるが、17 世紀にオランダ人が移住した頃に大学都市 Haarlem に因んで付けたと言われている。



- ☆ New Amsterdam の城塞図
1665～1667 年の第 2 次英蘭戦争でイギリスが勝利してマンハッタン島を獲得して、New Amsterdam から **New York** に変えた。

- ☆ 左図は上が西で、ハドソン川、城塞の右側の城壁(Wall)がそのまま現在の Wall Steet で、城壁撤去後も金融街に**ウォールストリート**として名を留めている。

③ デルフト (の) 眺望 に描かれた交易港都市 デルフト (図 1 の④)

- ☆ デン・ハーグ市街地の南に隣接して、一体となって広域市街を形成している。オランダの古都であり著明な観光地であるがデルフト工科大学を擁しているため、学生街という一面もある。16 世紀はじめにイタリアからマヨルカ焼きの製法が伝わり、陶器の製造が行われていたが、17 世紀、そこに**オランダ東インド会社**を通じて中国から磁器が伝わったことがきっかけとなり、当時日本から輸入されていた伊万里焼の影響をも受けつつ、独特の陶器が発展、生産が行われた。**青**を用いて彩色され、**デルフトブルー**と呼ばれている。

- ☆ フェルメール作品は室内画が中心であり、風景画は**デルフト眺望**と『小路』の 2 点のみとなる。



17 世紀に繁栄するデルフトの隣のロッテルダム港



“デルフト眺望” (フェルメール、マウリッツハウス美術館所蔵)

以上